

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

複雑系の学問としての本草学

著者	川? 瑛子
著者別名	KAWASAKI Eiko
ページ	1-162
発行年	2014-03-24
学位授与番号	32675甲第328号
学位授与年月日	2014-03-24
学位名	博士(学術)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://hdl.handle.net/10114/9508

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	川崎 瑛子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 542 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 田中 優子 副査 教授 小林 ふみ子 副査 玉川大学客員教授・武蔵野美術大学客員教授 荒俣 宏

複雑系の学問としての本草学

この論文の方法と意義

本論は三つの方法を持っている。第一は、江戸時代に限定し、原テキストに沿った歴史的記述である。第二は、先行研究を網羅し、それらの研究に対し、自らの視点と方法をつきあわせ確認する方法である。第三に、本草学という学問の意味を、近代科学の位置から再確認している点である。

本論はそれらの方法をもって本草学を「関係の学問」と規定した。その意味は、ものの世界における関係というだけでなく、ものと人間、人間と風土、世界各地のかかわり、天体とものなど、複雑な関係が同時に成り立っている関係である。

本論はその関係の学問に、現代の科学用語を参照した上で「複雑系」という用語を選択し、名を付けている。これは単に目新しいカバーをつけるためでなく、本草学の方法を今の視点で理解できるようにするためである。

本論は以下に述べる各章において、江戸時代の学者、学問、時代背景を具体的に取り上げ、文献に沿って可能な限り実証的に、本草学の知の構造を解き明かそうとした。本草学研究は通常は歴史研究であり、本草学に対して、その存在理由を問い、知の方法としての普遍性に迫る研究は、従来はなかったものである。

そのような意味で極めてユニークな研究であり、その観点から、本論は博士論文として認定すべき、意義あるものと判断する。

論文の目次

序章

本草学とは何か

第1章『新刊多識編』の世界

- 1 はじめに
- 2 『新刊多識編』の目的と蒐集される「名」
- 3 『新刊多識編』から見る本草学
 - 3.1 水部から見る名づけの判断
 - 3.2 日本へのまなざし
- 4 おわりに

第2章『大和本草』がもたらした日本本草学

- 1 はじめに
- 2 総論から読み解く『大和本草』の目的
 - 2.1 自序から読み解く益軒の目的意識
 - 2.2 定義された「博物ノ学」と手段の宣言
 - 2.3 物理の究明と拡大された思考の表明
- 3 『大和本草』が目指した本草学
 - 3.1 『大和本草』の分類法
 - 3.2 「標識」による蒐集と集合知
 - 3.3 民生日用の知
 - 3.4 浮上する日本像
 - 3.5 賞翫する精神と百出する花
 - 3.6 不思議な現象と異形の記述
- 4 おわりに

第3章 恕庵本草学の展開

- 1 はじめに
- 2 本草学者を取り巻く環境と学問観
 - 2.1 恕庵本草学へのまなざし
 - 2.2 本草学をとりまく価値観
- 3 『用薬須知』の解説からみる恕庵本草学の知の視点
 - 3.1 言葉とモノの同定
 - 3.2 産地の記述と優劣の判断
 - 3.3 薬効の記述とその目的

- 3.4 利用手段と製法の知
- 4 おわりに

第4章 薬品会の登場

- 1 はじめに
- 2 『文会録』が編集する知
 - 2.1 序文が語る薬品会の意義
 - 2.2 過去の知の更新
 - 2.3 観察と関係の考察
 - 2.4 記述される「衆評」
 - 2.5 『文会録』が編集しようとした知とその手段
- 3 『楮鞭余録』が編集する知
 - 3.1 序文が記述する本草学
 - 3.2 記述される土地
 - 3.3 再編集される古典
 - 3.4 日本と世界へのまなざし
- 4 おわりに

第5章 『物類品隲』による本草学の展開

- 1 はじめに
- 2 薬品会と『物類品隲』
 - 2.1 薬品会の歴史と開催の目的
 - 2.2 『物類品隲』の構成
 - 2.3 『物類品隲』からみる薬品会の様子
- 3 『物類品隲』に記述された薬品会の経験と知
 - 3.1 薔薇露から広がるヨーロッパの知
 - 3.2 金剛石から広がる東西の知
 - 3.3 石髓から見えるミクロとマクロ
 - 3.4 モノから広がる関係の渦
 - 3.5 スランガステインを巡る人々
 - 3.6 芒硝から繋がる歴史
- 4 おわりに

第6章 開かれている本草学の知

- 1 はじめに
- 2 兼葭堂のルーツと交流網

- 3 大槻玄沢と兼葭堂の関係からみる本草学の知の波及
 - 3.1 『一角纂考』と『六物新志』
 - 3.2 『六物新志』からみる蘭学の目的
 - 3.3 『六物新志』に記述される「出来事」と知の波及
 - 3.4 蘭学者と本草の知の関係
- 4 『遡遊従之』からみる本草学の知の伝搬
 - 4.1 南畝の疑問点と好奇心
 - 4.2 南畝が要求する本草学の知
 - 4.3 注目された海外の情報と回答の手段
- 5 おわりに

終章

それぞれの章の要旨と評価

序章

・概要

序章でまず論者は、江戸時代の本草学とは何かを、多くの先行研究を使って解き明かそうとする。「本草学」の定義は「博物学」という概念を巡りながら二分されていることを発見する。結論として論者は、集めた知識を体系づけることで新たな「知の構造」を作り上げたという事実があることを発見した。しかしその「知の構造」が明らかにされていないことも、明確になった。論者がおこなおうとしているのは、その「知の構造」の記述である。

・評価

序章では先行研究から導き出された本論の目的を述べると同時に、江戸本草学の特徴を、多岐に渡る内容と記述の幅広さゆえに生じる「複雑さ」にある、とした。薬効を論じたと思えば言葉の由縁に触れ、あるいは生活上の利用手段を解説するという、一見無秩序な記述が、「complicated」の状態ではなく、「複合の」という意味を持つ「complex」「complexity」の性質をもつことに言及している。つまり江戸本草学は要素に分解して理解することができる分析的学問ではなく、記述の「全体」で理解すべき学問であり、そこから論者は、その知の構造が「複雑系」に迫る方法と同じである、という仮説を立てる。「複雑系」は現代の自然科学などの分野で、要素に分解することで全体を理解する方法を用いることができないシステム（たとえば「生命」「知能」「思考」など）である。その「複雑系」の概念を用い、本草学を、「複雑系」を理解しようとする知の構造をもっている、とした。

第1章 『新刊多識編』の世界

・概要

林羅山『新刊多識編』(1631年)を中心に、江戸時代初期の本草学のありようを書いた章である。林羅山は徳川家に召し抱えられた最初の儒者である。羅山が『本草綱目』を参考にしながら編集したものが『多識編』であり、それが多くの版を重ねた末に出来上がったものが『新刊多識編』である。この文献が同定作業に集中していたことを紹介する。つまり古文書に出てくる名称の実態を弁明することを目的とする「名物学」にあたる。だからこそ本草・博物学が医師や本草家の範囲を超えて、一般の知識人や庶民のあいだにまで幅広く流布したのではないか、という可能性を考えた。

・評価

論者はすでに江戸初期において、中国の『本草綱目』を日本化する作業が、儒者によっておこなわれたことに注目している。この章によって、論者が本草学の歴史や性質そのものではなく、中国本草学を日本人がどのように日本化し、その風土の中で活用しようとしていたか、そこに着目していることがわかる。

本草学者、本草学書は非常に多い。論にあたって何を選ぶかによって、論文の方向と論旨が決まる。『新刊多識編』という選択は、アジアとヨーロッパを組み込んだ学問である性質、専門家の範囲を超えた学問である性質、様々な側面を組み合わせた「複雑系」に対応する方法をもつ、という性質を証する上での選択である。

第2章 『大和本草』がもたらした日本本草学

・概要

ここでは、羅山が『本草綱目』を参考にして『新刊多識編』を編集したのに対し、貝原益軒が『本草綱目』への批判精神に基づいて独自の方法によって『大和本草』(1709年)を書いたことを取り上げている。『本草綱目』に依存しない思考の枠組みを作り上げたという点において『大和本草』は江戸本草学の研究に重要な視点を提供する本草学書である。書名に「大和」を冠したことから分かる通り、日本の知を追究した末の成果は江戸本草学の発展に大きな意義を持っていることを、論者は発見している。

本草学という言葉に還元させることのできない「複雑さ」を『大和本草』は持っており、この「複雑さ」こそその後の江戸本草学の発展を促す要因の一つであること、蒐集された知識を体系づける手段や、江戸本草学の特徴と実体を明らかにする糸口ともなるもの、と位置づけた。

・評価

『新刊多識編』『大和本草』という選択が、本草学を網羅的にとらえる論文ではなく、むしろ大陸の学問の歴史を、日本の風土の中で「使える知」に再構成してゆく「知の歴史」を描こうとする意図が明確になっている。

学問の歴史を描くとき、その専門分野のなかでの微細な発見の積み重ねに注目する方

法がある。あるいはまた、重厚長大なものに権威づけられてゆく歴史に注目する場合もある。しかしそのどちらでもなく、視点の転換や新たな方法の開拓こそが重要だとする価値観もあるのであって、この論文はそちらに属する。

第3章 恕庵本草学の展開

・概要

松岡恕庵『用薬須知』（1726年）を中心に論じた章である。松岡恕庵によって日本産の動植鉱物の知識が著しく増大したことを指摘している。恕庵の知識は後の本草学の発展の一翼を担ったという評価である。また恕庵が本草学の研究を「聖人の学問」として意義付けていたことを指摘した。即ち儒学者が取り組むべきものかどうか、という問いが、このころまでくすぶっていたと思われる。

・評価

「名」と「モノ」を一致させる試みは、第1章で取り上げた『新刊多識編』でも行われていた。しかし『新刊多識編』から90年近い年月の間に本草学が如何に変化したのかを考察することは非常に重要である。恕庵は、幕府が設立した和薬改会所で集められた本草の薬事検査をする役目を負っており、幕府にも重要視された。そこから論者は、恕庵が構築した本草学を考察することは江戸時代の人々が欲した知識を知ることにも繋がる、と考えた。ここでは時代の要請と本草学の変化を捉えたことが、評価できる。

第4章 薬品会の登場

・概要

この章では、戸田旭山『文会録』（1760年）、豊田養慶『楮鞭余録』（1761年）を取り上げることで、全国から本草学を学ぶ人々がモノを持ち寄り質疑応答を行う薬品会という活動について論じた。

論者は薬品会を「江戸時代の本草学の新たな展開」としている。田村藍水が1757年に江戸で初めて薬品会を開催してから大坂や京都、名古屋にまで開催場所は広がり、途中で幾度か開催されない時期はあったが、幕末まで続いた活動であった。薬品会とは、江戸時代の人々の知的好奇心と知の交流の広がりを考察するうえで非常に重要な情報を与えてくれる活動である。

・評価

『文会録』では、出品物について列座の衆で互いに真偽を「質し明め」て「衆評の上」名を決定したいなどの細かい規則と会当日の大まかなビジョンを説明していることに、本章は注目している。このような事例から、まず秩序と規則に則った上で執り行われる緊張感のある学際的な「場」として設定していることを明らかにした。

また『楮鞭余録』については、「本草之学」という明確な認識が現れ、朱子学的哲理を持ち出さずとも、本草学独自の存在意義が認識されながら、薬品会が開催され始めて

いたことを発見している。

この章がまさに、序章で記述した、本草学的な知のありようがもっとも明確に出ている章である。文献研究から発足し、個人の研究者による実地調査を経て、薬品会という、各地各国の知識を交わらせることで新しい知の構造を獲得する方法に至った経緯が発見されており、高く評価できる。

第5章 『物類品隲』による本草学の展開

・概要

『物類品隲』（1763年）は最大規模の薬品会である第五回東都薬品会の会主を務めた平賀源内が中心となって編集した薬品会の解説目録書である。『物類品隲』からは当時どのような人物らが本草学に興味を持ち、如何なる知識を携えて薬品会を経験したのかが分かるのである。『物類品隲』を分析することは、薬品会の熱気を再現するに留まらず、どのような人々が本草学とどう関係していたのかを知ることにも繋がった。

・評価

『物類品隲』は最大規模の薬品会の実態を探るだけではなく、本草学の新たな展開を考察することが可能な本草学書であった。「『物類品隲』には人間とモノと世界の間で繰り広げられる「出来事」が編集されているのである。それは本草学が培ってきた経験と知の歴史の編集であり、本草学の「複雑系」の有り様を再構成する」と述べる。本草学を、今日言うところの「複雑系」に対応する学問のひとつであるとする根拠が、この章である。近代科学、分類学とは異なる情報のタグを無限に付加してゆく知のありようを、歴史を追いながら、この章で代表させている。

第6章 開かれていく本草学の知

・概要

木村兼葭堂や、大槻玄沢の『六物新誌』（1796年）、大田南畝の『遡遊従之』（1802年）を取り上げながら、薬品会によって本草学が大きく広げられたその後のありようを書く。薬品会を経験し、知を好む多くの人々の交流の中心点でもあった兼葭堂の本草学に関する知の構造が明らかになる。

・評価

本草学の歴史のみを書いてゆくのならば、取り上げる人物は異なる。「モノから名や環境、歴史などを連続して論じ続けていくことにより、影響と関係の網目構造を作り上げていくことはこれまでの本草学が書籍の中で構築していた知である。それを兼葭堂は「対話」の中で実践したといえよう」と書いているように、論者は本草学の学問分野としての展開をあえて取り上げず、むしろ、薬品会が生み出した「対話」による知を取り上げた。論者は知識を文献および学問ジャンルの完成としてではなく、知と思考とを交叉させ、展開し、広げる方法に、一貫して関心を寄せ続けるのである。「複雑系」に対

応する本草学がどのような場に支えられてきたか、という主張がわかる章である。

終章

・概要

本章では、江戸時代の本草学が小野蘭山や山本亡羊や水谷豊文に受け継がれて行ったことを補充している。本草学は一方では西洋の分類法による植物学へと転身を遂げ、また一方では、奇妙なモノへの好奇心と知的興奮は娯楽として消費されていくようになる。その本草学の行く末を見ながら、本章では再び、「本草学とは何か」に迫ってゆく。本草学に関して「体系の欠如」が言われる。確かに階層構造による分類と還元主義の道をとらない。論者はその性質を、「ありとあらゆるモノ、自然現象、人間の生活や歴史、心性、活動などが常に相互に影響を及ぼしあっている状態を見究め、複数の要素が組み合わせることによって変動を続ける世界を構築する学問」であり「関係の学問」であるとする。

・評価

「関係の学問」は、現代において人類生態学として現れていること、また「創発現象」ともなう複雑系の分野を対象とする方法にも存在することを、この章では述べている。

つまり、体系的でない本草学を体系的な科学が乗り越えたのではなく、関係によって相互が絶えず変質してゆく複雑な関係を科学はいったん捨象したのであり、それを捉える科学は再び起こり、まだその途上にある、という主張である。

さまざまな知の構造を「過去のもの」とするのではなく、また、進化するものだけでなく、現代において認識されないものごとの因果関係を、本草学がすでにもっていた方法によって、再度考えてみようとする姿勢が、ここでは高く評価できる。

論文全体の評価と審査結果

以上、各章に沿って評価を述べてきたが、全体として本論は、

- 1、本草学を過去のものとして切り捨てるのではなく、いまだ使いきれていない方法を持ち合わせている学問として注目した。「複雑系の学問としての本草学」というタイトルは、その姿勢を表現するものとして使われている。
- 2、しかし単に、現代的なイメージをかぶせているのではなく、産業の国産化時代であった江戸時代における本草学の歴史を、丁寧にたどった。
- 3、歴史的にたどるにあたって、本草学を医薬の実用として見るのではなく、さまざまな人がかかわる知の拠点として見た。
- 4、知の拠点として見ることで、本草学が中国の文献から脱して、日本の地を実際に歩くことで新たな知見につながったことを発見した。
- 5、さらに、個人としての研究者が研究を発展させるだけではなく、「薬品会」という

知が収集され交叉する場を作り上げた経緯を重視した。

6、薬品会の登場によって、本草学がまさに複雑系の研究をおこなうにふさわしい本領を発揮し、分類とは正反対である、「できるだけ多くの情報指標をもつ」方向に動いたことを、実証した。

7、その方法によって、学者以外の世界に飛び火していくことになったが、同時に娯楽的な博覧会と、近代科学に吸収される分類学との二つに分離し、長く忘れ去られることになった経緯をつかんだ。

8、以上の経緯のもとに、本草学的方法は、近代科学によっても未だ解明されない問題を考えるにあたって、「関係の学問」としての可能性をもっていることを、主張した。

以上のことから、本論は従来にない新しい視点と、それを証明する綿密で選択的な歴史記述をもつ論文であり、博士論文として認定する価値があるものと判断する。